

INTERVIEW

電力・ガス取引監視等委員会事務局 取引制度企画室
廣瀬 こころ 調査官
着任時期：2022年11月
経歴：コンサルティング会社



ーご経歴・現ポストに至る経緯を簡単に教えてくださいー

2020年に新卒でコンサルティング会社に入社し、エネルギー関連の部門に配属されました。エネルギー志望というわけではなかったのですが、元タインフラ系には関心があったので結果としては満足な配属でした。仕事としては直接電力に関わるというよりは事業者の業務改革や新規事業開発のプロジェクトが多かったですね。電取委への着任は、公募ポストがあり、社内でも後押しをいただいて実現しました。

ー電取委での勤務に踏み切った理由などはあったのでしょうか？ー

ちょうど直属の上司が電取委での勤務経験のある方で、国で働いて専門性を身につけて再び帰ってくるというキャリアもありかなとは思っていましたし、官庁訪問こそしませんでした。公共政策や行政にも関心があったので興味を持っていました。2年間コンサルから離れることに多少の不安はありましたが、社内でも背中を押していただきましたし、やらないで後悔するよりはということで決断しました！

ーご自身の中で大きな決断があったとのことですが、実際に着任されてみていかがでしたか？ー

正直、来る前はお役所的な風通しの悪いイメージやあまりフラットではないようなイメージもあったのですが（笑）、実際には健康的に働けていますし、着任した取引制度企画室が外部人材の多い部署だからかもしれませんが、上から下まで関係なくフラットに議論するような雰囲気があったのは嬉しい驚きでした。職場環境としてはコンサルと似ているのかなと感じましたね。

ーでは職場に馴染むのにご苦労などは特にされなかったのでしょうか。ー

実はそんなこともなく、最初は個人ブレイの雰囲気があってちょっと馴染めるか不安もあったんですが、やっぱり早く職場の方とも仲良くなりたくて自分で忘年会など企画してみました！そうすると皆さんとても気さくな方で今では局内でも有数の仲良し部署と評判です（笑）。



専門性を身につけて帰ってくるというキャリア

ーそんなムードメーカー的存在の廣瀬さんですが、業務の中で電取委で印象深いものなどはありましたか？ー

電取委に来てやはり行政の影響力の大きさは日々感じる事が多く、そうした実感は仕事の手応えにつながっていると感じます。具体的な話だと、自分が着任してからある評価に関する評価基準を明確化したんですが、実際に検討した基準に基づいて評価が行われ、その結果が世に出ることで各社の事業方針に影響を与えるというのはここでしかできない経験だと思います。

ー局内にコンサル出身の方は少ない印象ですが、そうした業務の中でご自身の強みを感じるのとはどのような部分ですか？ー

そもそも業務としてコンサルと似ている部分があると思っていて、コンサルであればクライアントとの打ち合わせ、電取委であれば審議会、といった目標から逆算して資料を作成し、ロジカルに詰めていくというプロセスが染みついていたのは強みだったと思います。段取りを意識してスケジュールを組んでプロジェクトを進めるという、行政でいう「ロジ」の部分の感覚があったことで、早期にキャッチアップして業務を遂行することができたのではないかなと感じます。

ー逆に、電取委に来たからこそキャリアが広がったと感じる点がありますか？ー

普通なら会えないような企業の幹部から話を聞けることや膨大な生のデータにアクセスできることで電力業界への知見は非常に深まったと思います。また実際に制度が設計されていく現場にいたことで、制度設計の動向から事業者に生まれるニーズを見極める等、制度設計の視点から逆算して、クライアントのニーズに応えるという新たな視野が生まれたことは、コンサルタントとしてのステップアップにつながる経験だったと思います。

ーありがとうございます。最後になりますが、何か一言！ー

今自分のやっている仕事と何か+αを掛け合わせたいと思っている方がいれば、そのαとして行政という要素はとても魅力的だと思います。大きな影響力を持つ制度設計に関われるのはここでしか経験のできないキャリアのステップだと思います。

制度設計
の視点
から
逆算して、
クライアントの
ニーズに
応える
という
新たな
視野

